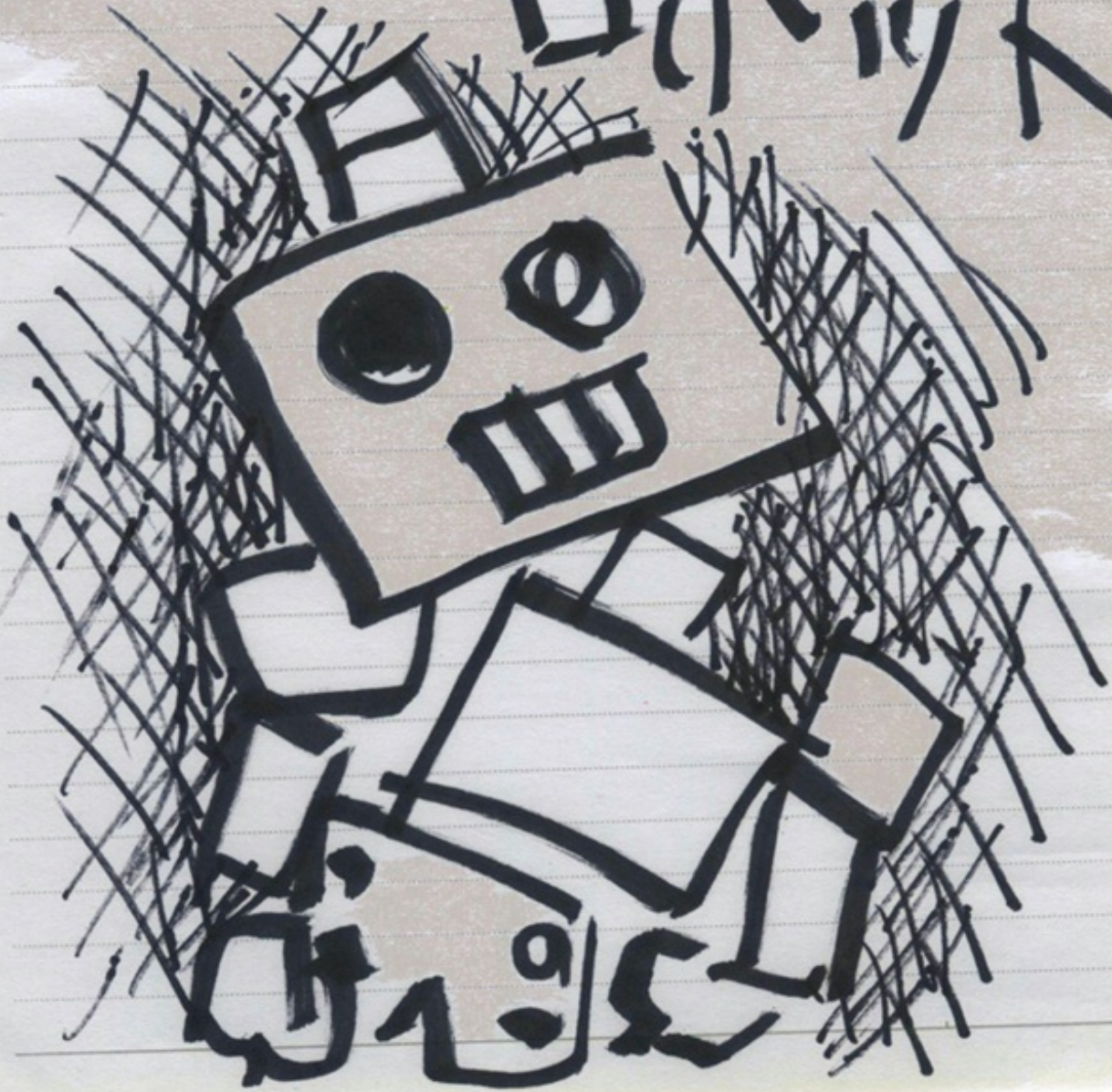


DATE/NO.

TITLE

徳丸志中
日赤組人



ナミダ

君のえぐれた心に
監視カメラ8台設置
僕以外誰も見てないから
安心して泣いていいよ

君が泣くなら僕も泣く
君がいやなら僕もいやだ
君が嫌いでも僕は好き
君が君が君が好き

君の顔を見るだけで
僕はMRIがとれる
まばたきひとつしないから
安心して泣いていいよ

「恥ずかしい」
「みっともない」
「心配されたくない」
「誰にも理解してもらえない」
そう思って声を殺してきたんだね
月に祈っても無駄
月は見てるようで何も見ていない
引きこもって
ケータイ鳴らなくて
みんながいるのにひとりぼっち

ありえないほど不細工な面で
ナミダを流す
君を抱きしめたい
傷だらけの手首と
あと君が好き
ガラス握るように君が好き

君の心を診るために
心臓を一回止めてほしい

君が好きなら僕も好き

君が死にたいなら僕も死にたい

君がいやでも離さない

握った手 君が好き

げつげつかーすいもくきんきん

僕の理性は壊れてしまった
絵の具を顔に塗りたくった
生きることに休みはなく
ただ華やかに汚された顔

垂れてきたそいつをなめる
樹脂か何かの
僕の受け付けない味がした
僕は味なんか信じなかった

げつげつかーすいもく...
あとなんだっけ？
脳は倒れたって働き続ける
火の車 自転車操業

僕の理性は壊れてしまった
水を撒いて火をつけた
水に火はいつまでもつかなかった
両手に抱えてたのはなに

げつげつかーすいもくきんきん
休日なんてないんだ
明日も人間に出勤しなきゃ
真っ暗な場所で頭抱えてた

もういいよ
もういいよ

げつげつかーすい
あとなんだっけ...
脳が泣いても知らぬふり
小さすぎる ダメすぎる

火の車 国債 自転車操業

げつげつかーすいもくきんきん

リリー

わたしはリリー 呪われた魔女
触らないで
わたしの両手に触れたら
あなたは死んでしまうの

両親も知らない
兄弟姉妹もたぶんいない
孤児院で育ったの
誰の手に触れることもなく

最初の記憶
木のゆりかご
倒れる人
レンガの家
待って
手をつなぐ
土気色
真っ黒な鳥
海に浮かぶ箱

わたしはリリー 人殺し
近寄らないで
早く逃げて行って
小さい頃何も知らずに抱きしめて
人を殺したの

花畑
青模様
止まったままの
古い靴
花を摘む
花びらを散らしてしまう
曇りのち雨
揺れるドレス

向こうの方に 人影
ここに来てはだめって伝えなきゃ
その女性は堂々と堤防を降りてきた

わたしはリリー 壊れた魔女
近づいちゃだめ
あなたは死んでしまう
その女性は言った
「そんなことあるはずないじゃない」

目を押さえて
逃げ出して
花束が散る
大きな橋
ここまでだね
孔雀の瞳
ざわめき
乱れたブロンド

「私を知らない？
ずっとずっと小さい頃から
あなたを見ていたわ
それは呪いなんかじゃなく
すてきな魔法なのに」

やめて
触らないで
抱きしめないで
両手に触れたらあなたは死んでしまう
わたしは わたしは 恐ろしい魔女なの

その女性は
微笑んで
嫌がる私の両手を 強く握った
「ずっとそう思い込んで大きくなったのね
人を遠ざけて 孤独の上に孤独を選んで
花畑で泣いて

抱きしめてほしかったんでしょ？
頬を両手で包んでほしかったんでしょ？
ぎゅっと
してほしかったんでしょ？

ぬくもり
小粒の雨
無音
頬に
少しの熱
きついコルセット
あなたは言った
「リリーの魔法は
人を殺すことも
癒すこともできる」

あなたはまだ生きている
どうして
あなたはまだ生きている！
誰もそんなこと言ってくれなかった
誰も向き合ってくれなかった
ずっとずっと小さいころから
寂しくて
私は呪いにかかってしまった

ぎゅっとして 一度でいい ぎゅっとして
呪いが 過去が リボンをほどくように解けていく

教会の壁画
静かな木陰
診療所
午後の光
指で触れあう
二人の頬
初夏の芝生
笑い声

花を摘む
今の心を
散らしてしまわないように
わたしは
わたしはリリー 魔女じゃない

わたしはリリー 白魔導士
今は診療所に勤めてる
小さな子に魔法をかければ すぐに泣き止むの
おじいさんが
腰が治ったって シワシワの顔で笑うのよ
いつかわたしの武器だった魔法で

人殺しが
許されるなんて思っていない
だから
わたしは精一杯 白魔法でそれ以上
人を癒すの
それでいいのかわからないけど

抱きしめる
若葉が
一枚だけ散る
旅に出た
洗いざらしの布
袋のミルク
古い時計台
鐘が鳴る

布団になってしまいたい

一番一番 悲しいのは
布団じゃないかって思う
大事なご主人様を
夜中にいつも目覚めさせてしまう
悲しんでるのがわかる
怒りさえあるのかも
だって僕が眠れないとき
なんともいえない皺が寄るんだ
いっそのこと
いっそのこと
布団になってしまいたい
身体が同化して
頭がどうかして
だけど布団になれたからといって
やっぱり僕は悲しみを
感じてしまうだろう
まともに会話ができない
歩くのもおぼつかないご主人様を
あなたはいつも気にしている
可哀想なくらい
布団に皺が寄ってるのは
僕がこんなこと願ってるとき
明日なんて明後日なんて
あったって苦しいだけなのに
みんなそうやって励ますの
いっそのこと
いっそのこと
布団になってしまいたい
残念ながら
布団の悲しみなんて
僕の悲しみには遠く及ばないけれど
ああ ああ
みんな悲しいだろうけど
一番悲しいのは布団
ご主人様が 病んでゆくのを

その寝返りを受け止めているから

いっそのこと

いっそのこと

みかんの木ならどうだろう

切られても一瞬

痛みもなさそう

小鳥が食べてくれるだろう

いっそのこと

いっそのこと

布団になってしまいたい

身体はどうかして

脳は同化して

だけど僕は 布団になっても

悲しみを感じてしまうだろう

いばらの道

幸せな道 いばらの道
だいぶ歩いてきたけど
天国なんてどこにもなかったよ

でも地獄なんてものもなかった
いばらの道にも救いはあったの
泣いているわたしのそばには
いつも涙で顔の見えない
誰かがいた

今更引き返せない
引き返したくない
二度と同じ人生なんかいらぬ
人間に生まれたくない...

だけどわたしのそばには
いつも誰かがいて
震える肩を抱いてくれてた
優しい言葉をくれた
少しも知らない人でも
はじめて出逢った人でも！

何も後悔していない
誰かに負けたなんて思わないよ
何も悪いことしてないし
自分は正直だと
胸を張って言えるから

わたしがいばらの道で
うずくまりかけたときに
かならず肩を抱いてくれるのは誰？
今まで誰かも
どこから来たのかもわからない誰かと
そうこれまでも
手をとってやってきた

最後まで幸せな奴なんて負け犬だ
別に強がりですえない
眠れなかったらカーテンを開けて
夜の青が明けていくのを見ればいい

悲しい道 楽しい道
いろいろ歩いてきた
そして今も
わたしはいばらの道の真ん中に裸足でいるよ

名前も知らない
言葉も違う
さっき出逢ったばかりのあなたが
わたしを支えてくれるのはなぜ？
強くなれる！
いばらを踏んでも笑ってられるよ
堂々と進んでいける
痛みに泣くこともない
あなたとなら

天国なんてないし
地獄なんてものもない
ここが地獄と決めつけしないで
一緒に行こう！
いばらの道を
支えあいながら

ダイアード

あんたほどブスな奴はじめて見たわ
でもあんたも同じこと思ってんだな
その服のセンス最悪最低なんだけど
あんたも僕のそこ疑問に思ってるよな

あんたと僕はダイアード
ダイアード
あんたには何も望んでない
好きなように言いたいように
悪口を言えばいいさ

あんたと僕はダイアード
ダイアード
過去を消せる消しゴムなんて
どこにもない
友達のつもりだった自分が悲しい
ごめん 無理

真夜中1時にナメクジが這う
陰湿なところと顔があんたに似ている
でもあんたもスズメバチを見て
僕みたいに危険な虫と思ってんだろ

僕が楽しすぎて息ができないとき
あんたは耳栓で息ができない
それでも友達のつもりでいたのに
あんたもそうだったのかな

あんたと僕はダイアード
ダイアード
どれだけ似せてみたって似てきたって
心の色が違うのだから

あんたと僕はダイアード

ダイアード

黒を塗りつぶせる思い出なんて

どこにもない

親友だと思ってた

ごめん 無理

どっちでもいい

どっちでもいい

あんたが不幸になろうがなるまいが

でも嘔吐きのところに

幸せは来ないと思うけど

でもあんたも同じように

僕が幸せにならないって思ってんだな

ワガママってあのとき言ってたから

どうでもいい

どうでもいい

所持金が3円しかないとかあんたが言う

うまい棒をいくつ買ったんだよ

あんたと僕はダイアード

ダイアード

ハートとスペードの関係

逆さになっても同じになれない

ごめん 無理

僕が寂しすぎて悲しすぎて消えたいとき

あんたは他の奴のことで悩んで消えたい

それでも友達のともしりていたのに

あんたも同じことを考えてるだろうか

僕は木 ただの木

何も望まないから

傷つけないから

黙ってるから

そっと消えてくれよ

ダイアード

ダイアード

悲しいけど

月がきれいだね

この世に夜があってよかったと
心から感じたあの日
公園の時計は午後8時
誰もいない 誰もいない 音もしない

君はここから見る夜景が好きだと
車を止めてドアを開けた
荷物そのまま 茶のボトル持って
わたしは下駄だから 足元に気をつけて
カメラだけ持って

夏目漱石はI love youを
「月がきれいだね」って訳したんだってさ
切ないとき
目にとびこんでくるものは
星でも夜の街でもなく
月なの

月がきれいだね
おかしいな いつも見てるただの月なのに
なんで涙が止まらないの
優しい君は心配するけど
月のせいじゃなくて 君のせいだよ

ダーリン
月がきれいよ
もっと君のために
輝くわたしになりたい
ダーリン この浴衣似合うかしら？
いい匂いの暗い場所に連れてって
ダーリン 月がきれい
君と見る月が きれいだね

現実夢と白昼現実

今
もしこれが夢だったらな
現実夢だったらな
いつか目が醒めて
もっとやりたい事をやれるのにな

現実夢
きっと夢なんだろう
とても長い切ない苦しい夢を
見ているんだろう

薬を20錠飲み 歩くのも精一杯
感情を失っていく自分の悲鳴が イヤホンからきこえる
夜になると カエルが泣くよ
きっと泣いているんだろう
可哀想に思ってくれてるの それとも味方でいてくれるの？
ベッドの上に横たわる 私を

助けて
こんなの認めない
現実じゃない...
現実夢
ただの夢

白昼現実を見た
昼間ウトウトして
私は元気な高校生
成績がよくて 鉄棒得意で 学級委員で 美人で
スカートの丈を思い切り短くして 羽ばたけるように
自転車でどこまでも...どこまでも行ける 行ける...

今
もしこれがエイプリルフルのような
見せかけのお芝居で 嘘で でたらめで

現実夢だったらな
いつか目が醒めて部活に補習に行けるかな
やりたい事をやれるかな
だって私はまだ高校生

私を見て
私を見て
きれいでしょ？
かわいいでしょ？
誰も信じてくれないけど 高校生なの
私を見て
私を見て
私 きれいでしょ？
きれいなのに
外にも庭にもひとりで出れないの
私を見て
私を見て
もっと見て
こんなにきれいに咲いたのに
ベッドの上いつもの汚いパジャマで 横たわるだけ

感情が空から降ってきて
押し潰されて
壊れた ロボット

今
もし現実夢が映画で
いつか見終わる日が来たなら
やりたい事 はじめたい事 いっぱいある
白昼現実の中では若い女の子
誰も信じてくれないけど
今でも短すぎるスカートを風になびかせて羽を広げる高校生

もしこれが夢だったらな
いつか病気が治ったなら

やりたい事をやりたいだけやりたい
きれいになった私の姿を
見て 見て 見てほしい

プレスされて
壊れたロボット
バイバイ
私は壊れてなんかいないよ

タイトル未定

<http://p.booklog.jp/book/107103>

著者：雨野 小夜美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tinycolor/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107103>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107103>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ